

追 悼



故 三村信英 先生 略歴

(大正15年5月12日生—平成23年7月10日没)

(写真提供：朝日新聞社)

< 学歴・職歴 >

昭和27年3月 東京大学医学部卒業
昭和28年4月 医学実地修練(東京大学医学部附属病院)
昭和29年4月 東京大学医学部第三内科(沖中内科)入局
昭和31年10月 同 助手
昭和34年4月 医学博士号取得(東京大学第 7678 号)
昭和37年7月 虎の門病院医員
昭和43年4月 同 循環器科主任医員
昭和48年6月 虎の門病院分院長
昭和50年2月 同 腎センター部長
昭和62年4月 虎の門病院副院長
昭和63年12月 国立佐倉病院院長
平成4年4月 虎の門病院院長
平成9年3月 定年退職

< 学会・学術団体関係 >

日本内科学会評議員・功労会員
日本腎臓学会理事・名誉会員
日本透析医学会理事・名誉会員

日本透析医会理事

社団法人腎研究会(現日本腎臓財団)評議員・幹事
腎と透析編集顧問
昭和49年 日本臓器学会会長
昭和61年 日本透析療法学会会長

< 社会福祉・審議会 >

昭和46年 神奈川県腎不全対策懇話会委員
昭和48年 中央薬事審議会臨時委員・調査会委員
昭和58年 神奈川県腎不全対策推進委員会会長
昭和62年 川崎市医師会腎不全対策部会長
昭和63年 東京都腎不全対策協議会委員
平成1年 千葉県腎移植推進連絡協議会委員
平成3年 厚生省公衆衛生審議会専門委員

< 賞罰・受賞 >

平成5年 厚生大臣表彰(多年にわたる腎不全対策推進)
平成9年 腎研究会賞(現日本腎臓財団賞)
平成13年 勲三等瑞宝章受章

三村信英先生を偲んで

東京女子医科大学名誉教授・横浜第一病院

二瓶 宏

日本腎臓学会名誉会員、日本透析医学会名誉会員の三村信英先生が、平成 23 年 7 月 10 日にご逝去されました。虎の門病院を退職される前から視力や発語、歩行などに少しご不自由されておられましたが、持ち前の気力と信念で病院長の重責を果たされました。退職後も顧問として活動が続けておられましたが、少しずつご自宅で過ごされる時間が多くなり、この数年は車椅子生活が中心になってしまいました。亡くなられる前日のご長男のお話から、かなり状態が悪化されたと感じましたが、まさか翌日とは考えませんでした。中心静脈カテーテルの感染から敗血症を起こされ、蠟燭の火が消えるように静かに旅立たれました。享年 85 歳の御生涯でした。

三村先生は大正 15 年 5 月 12 日に長野県松本市で誕生され、旧制松本高校を経て、東京大学医学部へ進まれました。昭和 27 年にご卒業、1 年間の医学実地修練の後、第三内科学教室(主任・沖中重雄教授)に入局なさいました。実験腎炎に打ち込んでおられた柴田整一先生の第三研究室に配属されましたが、しばらくして沖中教授から腎不全の研究を指示され、主軸を腎不全へ移されました。私が虎の門病院でご指導を受け始めた頃に当時を振り返られて、「随分と抵抗したんだけど、尿毒症は塵の山ではない、宝の山だよと説得されてね」と話されたのを思い出します。当時の東京大学附属病院では新しい治療を進展させることは難しい雰囲気があり、沖中先生が虎の門病院院長に就任される 1 年前の昭和 37 年に虎の門病院へ移られました。昭和 41 年に自ら中心となって虎の門病院分院を開設され、ここを足場に活動を展開することになりました。

三村先生の腎臓病学領域でのお仕事は広範囲にわたりますが、慢性腎不全治療、特に透析治療の開発と普及に尽力されたことが評価されます。昭和 42 年頃の自動腹膜灌流装置の開発や腹膜ボタンの実用化は現場でのご苦労が発想の起点になったものと考えられます。血液透析でも同様で、外シャントでの困難に対し、Brescia が動静脈瘻の使用を提唱した翌昭和 42 年に稲生綱政先生が紹介され、三村先生は多数の臨床例に応用・論文化してわが国に定着させました(44 年)。先生はすべてご自分の経験に基礎をおいて研究を進めて来られました。45 年に偶然もあって多数の症例が集まり、骨代謝と異所性石灰化に興味を持たれ、ビタミン D 代謝産物の分画測定と合成が可能となって臨床応用を試み、52 年の多施設共同研究の結論に至りました。50 年代には透析治療の普及が急がれ、Milton-Roy 社のキール型ダイアライザー用個人透析液供給装置を参考に国産化を実現されました(50 年)。この時期には中空糸ダイアライザーや血液チューブなど機材や薬剤、希釈水の開発が急速に進み、リグニンを徹底的に除去した高圧蒸気滅菌ダイアライザー(52 年)、糖抜き透析液(52 年)と重炭酸透析液(53 年)の開発、逆浸透純水装置の導入(53 年)、メシル酸ガベキサートの治験(57 年)などに矢継ぎ早にかかわっておられました。エリスロポエチンの開発には、治験以前からキリンビール医薬品開発部の相談を受けて 65 年の承認まで力を尽くされるなど、三村先生は透析治療が今日のように発展普及する基礎を確立され、人材の育成や技術の開発にも貢献されました。先生の発想と展開に私どもの能力が追いついていけず、ご指示いただいた事項のかなりの部分が達成できなかったことを申し訳なく思っております。例えば、活性炭に関する基礎的検討(60 年)、手根管症候群で沈着するアミロイド様物質の解析(62 年)、52 年から症例を集積していた家庭透析のまとめなど、歯がゆ

く思われたことと今も申し訳なく存じております。

三村先生は真の臨床医であり、まず目の患者に学ぶ姿勢を貫かれ、診療から研究課題を求め、その成果を診療に戻すことを理念とされました。弟子たちには、たとえ患者さんが不条理な要求をされても、意図を理解するように諭されました。しかし厳しいだけでなく、ひょいと車で松本に行かれ山で楽しかったことを子供のように話されたり、お人柄は広く穏やかで診療仲間を大切にされ、私の父が亡くなったときには会津まで来訪されたことを今もって有難く思い出します。

虎の門病院は国家公務員共済組合の基幹病院で、全国から症例が集まることで臨床力を磨かれ、官公庁との関連で沢山の審議会や公職に携わられました。昭和 54 年から丸 1 年、大平総理大臣の随行医師として数カ国を訪問されました。

これらの業績に対し、日本腎臓学会と日本透析医学会は名誉会員に推挙し、平成 6 年には厚生大臣表彰、平成 9 年には腎研究会賞(現日本財団賞)、平成 13 年には勲三等瑞宝章を受章されました。

三村先生からはまだまだご指導・ご助言を賜りたいと思っておりましただけに、ご逝去は非常に残念でなりません。次世代の腎臓医は三村先生が築かれた腎の臨床と研究をより発展させるべく一丸となって邁進することが求められます。

三村先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。安らかにお休みください。

平成 23 年 8 月